

【研究ノート】

エステル・デイヴィッド『*Book of Esther*』と インドのベネ・イスラエル II

小磯 千尋

はじめに

今回は『*Book of Esther*』の前半2章の概要を説明しながら、インドにおけるベネ・イスラエル・コミュニティの置かれた状況を概観した。時代背景は18世紀後半から20世紀の前半までである。3章では2章で奔放な生き方を貫いたジョシュアの結婚と娘エステルの幼少期が描かれる。動物園経営などに才を発揮するジョシュアのユニークな人生が語られている。本編のエステルの父親ジョシュアは、実在のエステル・デイヴィッドの父親レーベン・デイヴィッド (Reuben David) がモデルである。

1. 3章のあらすじ

ジョシュアとナオミの結婚

学校教育に馴染めなかったジョシュアはよくサバルマティ川で泳いだり、川辺で水鳥などを観察して時を過ごしていた。文字を読むことを好まず、長時間座り続けることができなかった。本を読むというよりは、写真やキャプションを見ることを好んだ。特に自然や、犬をはじめとする動物の本や彫り物の施された家具、彫刻や絵の本を好んでいた。学校へ行くのは英語の授業

の時だけで、そこでシェイクスピア文学を聞くことがお気に入りだった。優秀な姉や兄と違い、進路が定まらないジョシュアに父デイヴィッドはいつも辛く当たった。母シェババスはジョシュアをかばい続け、いつか彼が大成すると信じていた。学校をドロップアウトしてからは、一旦紡績工場に勤めたが、そこも長続きせず辞めてしまう。ボディービルディングでグジャラート代表になったり、映画スターにスカウトされかけたりしたこともあったが、厳格な父の反対にあい、スターの道は諦めた。しばらく定職にもつかず、藩王の狩りをアレンジして随行したり、ライフルの整備を行うなどして、藩王に重宝がられていた。暇があると仲間たちと狩りに出かけて鳥や動物を仕留め、野外でそれを調理して食べていた。そんななか、独学で動物の剥製作りの技術を身に付け、剥製作りに才能を発揮していた。

ジョシュアの集中力と才能を見抜いた兄は、ジョシュアに剥製術と獣医学の通信教育を勧めた。これはイギリスの獣医学会が提供する通信教育で、修了後には医師の肩書がもらえた。兄の助けもあり、ジョシュアは定期的に課題や試験をロンドンまで郵送して無事合格することができた。兄はジョシュアに「Dr.Joshua David」のネームプレートを贈った。

その直後にデイヴィッドが急死し、妹のソフィーもコレラで亡くなる。失意の母シェババスが元気を取り戻すきっかけとなったのが、ジョシュアの扁桃腺炎であった。高熱が続いて、下がらず、最終的にボンベイの病院で手術を受けることになり、兄メナチェムの許嫁のハンナの家で世話になる。メナチェムに付き添われてジョシュアがボンベイに到着したときには、彼の喉はカエルのように腫れ、高熱を出していた。すぐ手術が行われ、術後はハンナの家族の看護を受けながら回復を待った。ハンナの友人の一人がのちに、妻となるナオミである。ジョシュアはナオミの写真を見て気に入ってしまう。ナオミはハンナの親しい友人で隣人であったが、諸事情でホステル暮らしをしていた。

実際にジョシュアがナオミを見るのは、兄メナチェムとハンナの結婚式である。ハンナの付き添い役で結婚式に参列していたナオミは背が高く、威厳

のある女性で、ジョシュアは一目惚れしてしまう。彼女は父親の浮気が原因で、母親が家で自殺するという悲しい経験をしていた。正式に結婚の申し込みの手紙がジョシュアからナオミの父親に送られたが、すぐに返事はなかった。ナオミの父親ナオガオカル (Navgaokar) は、出張のついでにジョシュアに会いに来るも、彼が定職についていないことと高い教育を受けていないことを理由に、娘への結婚の申し込みを断ってくる。ショックを受けたジョシュアはそれから10年間、狩りを企画したり、ライフルの修理を行って過ごし、一言も「ナオミ」の名前を口にすることはなかった。ナオミへの想いを封印していたジョシュアであるが、義姉のハンナから思わぬナオミの近況を聞く。彼女の父ナオガオカルは再婚し、妹たちもそれぞれ独立し、ナオミはボンベイから遠く離れた町フブリ (Hubli) で全寮生の学校の英語教師として働いていた。父もその再婚相手もナオミへの仕打ちがひどく、彼女はほとんど家には帰らない状況だという。ハンナから連絡先を聞いたジョシュアはすぐにナオミに結婚の申し込みの手紙を書くも、ナオミはすでに30歳になった自分は、今後一人で生きていく決心をしたと返答してきた。ハンナはジョシュアをけしかけ、すぐにナオミを迎えに行くように言う。意を決して、フブリにナオミを迎えに行ったジョシュアはナオミを連れてアフメダーバードに戻って来た。二人が結婚を決意したのは1942年のことであった。ちょうどインドでは「イギリスはインドを出ていけ (Quit India) 運動」¹⁾が始まった頃である。

ダンデーカル一族は経済的に一番苦しい時期で、一家は引っ越しを余儀なくされた。デリー門近くの家は貸家に出された。当時産婦人科医として働いていたジェルシャ (Jerusha) は給料の半分以上を仕送りしていた。ジョシュアも狩りや犬の交配によって得たお金を家計に回していた。家計を担う中心は兄のメナチェムが父親から譲り受けたクリニックからの収益であった。しかし家族は増え、それでは十分とはいえなかった。メナチェム夫妻は2人の息子と2人の娘をもうけていた。

ジョシュアも徐々に独立しつつあり、彼の骨とう品や銃、トロフィー、本

や犬たちのために離れを借りるようになった。ジョシュアとナオミはベネ・イスラエル・コミュニティで初の民事婚を挙げた。花嫁の父の許可がない結婚はシナゴグでは挙げられず、ユダヤ教の教えに背く結婚となってしまった。それによって村八分的な扱いを受けたジョシュアはしばらくベネ・イスラエル・コミュニティと距離を置くようになる。この冷たい関係は彼がインドの勲章であるパドマ・シュリー（蓮華大賞）²⁾を受賞する1975年まで続くこととなる。

ジョシュアとナオミの結婚後、メナチェム一家はジョシュアたちを残して、新しい家に引っ越す。その頃までには、ジョシュアも一家の主として責任を自覚し始めていた。しかし、ジョシュアはスポーツとしての狩り、無駄な殺生に心を痛めていた。

結婚3年後にナオミは妊娠する。体調不良が続き、産婦人科医である義姉ジェルシャと義母シェバベスのもとので過ごすことになる。

ジョシュアが狩りからの引退を考えていた頃、人食いヒョウを撃たねばならない状況になった。ちょうどヒョウを待ち伏せしていた時に、妊娠中の鹿が現れて、一緒にいた狩りの仲間がそれを撃ち殺してしまった。血みどろで横たわる母鹿の絶望的な目を見たジョシュアはいたたまれなくなり、小鹿を抱き上げキャンプに連れ帰る。小鹿とともにアフマダーバードに戻ったジョシュアは「娘へのプレゼントだ」とナオミに告げた。

当時すでに狩場に野鳥や動物たちは減り、ジョシュア自身はハンターから自然擁護派に転じつつあり、スポーツとしての狩りに反対を唱えだした。また、イギリスからの独立にともなって、ジョシュアの主なパトロンであった藩王や太守たちも過去の栄華と決別を迫られていた。

ジョシュアは家族を養う上で、何をなすべきか考えあぐねていた。今さら雇われる仕事に就く気はなく、かといって俳優や音楽家になることもできなかった。彼は動物病院を開くことを決意する。パランブルの藩王の召使であったモイスツディンを雇って、銃や武器の修理の仕事も引き続き行い、剝製作りの要請があると、ジョシュアは剝製師として働いた。

そんな中、独立2年前の1945年、エスターが誕生する。エスターが生まれてからもナオミは小学校の教師として働き続けた。ジョシユアの武器の修理と犬の繁殖ビジネスは軌道に乗っていた。モイヌッディンは武器の知識が豊富で、独立闘争のために爆弾作りも行っていたようだ。

間に親戚の叔父とイギリス人女性のロマンスが語られる。

アフマダーバード初の動物園

ジョシユアの本領が発揮されるきっかけとなったのがアフマダーバードに設立された動物園³⁾である。それまで移動動物園や遊園地に併設された小規模動物園はあったが、公営の本格的な動物園はジョシユアの尽力によって運営された。この始まりは、チャンドゥー・ラル (Chandu Lal) 教授によって運営されていた移動動物園とサーカス一座が教授の高齢化に伴い運営が厳しくなり、1956年にアフマダーバード市に売却されたことである。当時映画以外に娯楽のなかったアフメダーバード市民のかっこうの娯楽になると見込まれてスタートした。当時の市長は留学先のロンドンで動物園を訪れており、インドにも本格的な動物園を紹介したいと思っていた。運営を任せるために白羽の矢が当たったのがジョシユアであった。

ジョシユアは動物園をカンカリア (Kankaria) 湖の周辺に建設した。動物園は「ヒル・ガーデン動物園」と名付けられた。まずチャンドゥー・ラル教授から引き継いだ鳥類のための飼育場が湖のほとりに開設された。続いて色鮮やかな熱帯魚を展示する10の水族館が建てられた。ジョシユアはいろいろ、ヒョウやライオンをはじめとする猛獣も飼育したいと考えていた。

ジョシユアの動物園開設を知ったかつての狩り仲間、パランプルの太守ザバルダストカーン (Zabardastkhan) から励ましの手紙とともに、6か月の子ヒョウを寄付したいという申し出があった。彼らがともに狩りをしていた時代に勢子として加わっていた部族民ラク (Rakhu) が母ヒョウを殺して子ヒョウを太守に売りつけにきたという話であった。以前ジョシユアが太守に動物園でライオンやトラを飼育したいと話していたので、まずはヒョウから

始めてはどうかと提案してくれた。新聞報道によると、アフマダーバード市側は肉食獣を飼育することをよしとしないということであったが、太守の提案で、太守からヒョウが寄贈されたとなると、市側もそれを拒否できないだろうという読みから計画を推進した。こうして大々的に新聞に取り上げられ、子ヒョウはジョシュアの許にたどり着いた。

ある冬の寒い朝、飼育員ジャガン (Jagan) は酒に酔った末の不注意で、トラのラージャーとラーニーの獣舎の開けてはいけぬドアを開けて昼寝をしに行ってしまった。園内をうろつき始めた2頭の猛獣に、他の動物たちも氷ついてしまう。助手のバーブー (Babu) から知らせを受けたジョシュアは、2頭をなんとか無傷で檻に戻そうとする。2頭は動物園で生まれており、彼ら本来の力を自覚してはいなかったが、2頭とも十分に成長した成獣だった。

園内は不気味な静寂に支配されていた。ジョシュアは2頭を追い求めて園内を動き回った。その時、安眠を妨害されたフクロウが騒ぎ始めた。インドではフクロウは縁起が悪いとされ、バーブーは顔を引きつらせる。ジョシュアの後ろに控えていたバーブーはその時、恐ろしい獣のうなり声を耳にする。その声がジョシュアの声と気づくまでにしばらく時間がかかったという。バーブーが繰り返し思い出して語るには、その時ジョシュアはトラに変身していたという。ジョシュアの唸り声は大きくて、まるで地面が振動しているかの様だったという。唸り声をあげながら、ジョシュアはラージャーとラーニーに近づき、2頭を完全に支配下に置いてしまった。2頭は催眠術にかかったかのように、尻尾を下げ、自分たちの獣舎に戻って行った。ジョシュアはトランス状態に陥ったかのように、顔は赤く、瞳孔は拡大していた。それはまるで奇跡を見るようだったと、晩年バーブーは繰り返し語っていた。この出来事依頼ジョシュアは「アフマダーバードの奇跡の人」として知られるようになる。

ラージャーについては後日談があり、不運が重なり、カラスの群れに片目

を突かれ、片目を失ってしまう。

当時のジョシュアの家の居間にはジョシュアが太守とともに狩りで仕留めたライオンの剥製が鎮座ましましていた。動物園の経営方針や今後に対して行き詰まりを感じるとジョシュアはパランプルの太守ザバルダストカーンに手紙を書いていた。手紙を読み、ジョシュアの苦境を察すると、太守は週末にジョシュアのもとに駆け付けた。彼はいつもアフリカ出身の黒い肌のバーシル (Bashir) を連れていた。来客があるときのエスターの定位置はライオンの剥製の股の間であった。ある日太守が訪ねてきたときに、太守はジョシュアの動物園運営の困難さに理解を示し、彼の従者であるバーシルをジョシュアに譲ることを決める。バーシルは太守の毒見係も務めており、太守の従順なしもべであった。ジョシュアへの譲渡を言い渡されたバーシルは子供のように泣いた。太守は後ろを振り返ることなく、その場を後にした。あとには「バーシルの食費」と書かれたメモとともに10枚の100ルピー札が置かれていた。

それからバーシルは動物園の小さな木の小屋に暮らした。ナオミが学校で授業があり、学校が休みで動物園に連れてこられたエスターに園内を見せて回るのはバーシルの役目だった。バーシルは藩王一族がエチオピアから連れてきた奴隷で、彼らはシッディー・バドシャー (Sidi Badshah)⁴⁾ と呼ばれていた。バーシルの父親は太守の犬の世話係で、ジュンナガル (Junnagar) の太守とともにパキスタンに移住し、バーシルはジャバルダストカーン太守の元に残された。バーシルは狩りの射撃手として訓練を受け、森や動物に対して深い知識を身に付け、そののち太守の毒見係にまで昇進した。

動物園でも彼は飼育係に昇進し、園の外に家を借りて暮らすようになった。バーシルが園に来てから15か月後に、ジャバルダストカーンが亡くなった。ジョシュアもバーシルも悲しみに打ちひしがれた。バーシルは泣き暮らし、床に臥せてしまう。その時に面倒を見てくれた家主の妻と彼は不義の関係となってしまう。そのことが家主の知るところとなり、妻は幽閉状

態に置かれ、バーシルは家を追い出されてしまう。失意のまま、ある日バーシルはライオンの檻の中に入った状態で発見され、ジョシユアとバーブーの機転で紙一重で難を逃れた。なんでライオンの檻に入ったのかとジョシユアに問われても、バーシルは答えなかった。それから猛獣の飼育係から熱帯魚の飼育担当に移された彼は、しばらくしてからライオンの囲いの中から遺体で発見された。

ジョシユアの動物好きは周知のことであったが、彼はことのほかヒョウを好んでいた。幼少期に、彼の祖母スィムハから聞いたダンダの家で飼っていたヒョウ、チッタの話や、ガラス絵を修理していたときに、下絵で目にしたソロモンの肖像画の足元に描かれていたヒョウのチッタの姿を見つけて心惹かれたようだ。動物園を開設した当初、ジョシユアは野生の動物との出会いについて新聞に毎週コラムを書いていた。ジョシユアはアブー山での狩りで、ヒョウと対面したときの神秘的な体験について書いている。

私たちはデッキチェアに座って、バーシルがヒョウを見つけたという知らせをもたらすのを待っていた。私は高台から撃とうと計画していた。一晚中待ち続けたが、ヒョウを目にすることはなかった。その前日私たちはヒョウの足跡を目にしていたが、ヒョウは姿を現さなかった。私は疲れていた。早朝、まだ暗い頃、私は高台から降り、森の空気に触れ一息ついていた。乾燥した葉の上を流れる水音は不気味で、私は自分の心臓がドクンという音を耳にした。周りを見回した。森は目覚めたばかりだった。クジャクやオウチョウ鳥、ハチクイ鳥の鳴き声や鹿の鳴き声を聞いた。朝の森は新鮮で清浄だった。私は深く息を吸い込んで、タバコに火を点けた。突然、見られていることを意識した。

私は巨大な動物が私に忍び寄る気配を感じた。咆哮でない咆哮を耳にし、唸り声になっていない唸り声を耳にした。引つかかれることもなく、鋭い爪の感触を首に感じた。触れられることなく、大きな猫の固い毛の感

触を感じた。振り返ることなく、私は斑点のついた金色の毛皮を見ることができた。その目が私の上に注がれるのを感じた。私の腹部に恐怖の塊があった。突然、それは溶解し何か別のものに変化した。恐怖は私の胸から咆哮へと姿を変えた。微動だにせず、振り向くこともなく、私は目を動かしてヒョウと見つめ合った。すると気づかぬうちに、その動物は優美な歩みで私から離れて行った。私たちはしばし見つめ合っていた。私は自身の唸り声を聞いた。ヒョウは私の唸り声に怪訝そうな表情を示した。しばらく私を見つめたあと、向きを変えて、数秒のうちに森に消えて行った。

その魔法のような瞬間は銃声でかき消された。次の瞬間、ジョシュアはヒョウが死んで横たわっているのを目にすることになる。

ジョシュアとヒョウの両者の間には何らかの交信がなされたようだ。ジョシュアは一度目を見交わした動物を殺すことを望まなかった。

このとき、ジョシュアは高台に友人がいることを忘れていた。彼はジョシュアがヒョウに襲われると思い発砲したのだ。その日彼らは、それ以上動物追跡を差し控えた。

これは森がジョシュアに教えた教育の始まりに過ぎなかった。ジョシュアが亡くなる2年前にも、同じような経験をした。彼は野生の雌ライオンと対峙することになった。彼らは5分ほど見つめ合った。ジョシュアは静かに岩の上に座っていた。すると、ライオンは向きを変えて藪の中に消えて行った。ライオンはジョシュアを人間とは思わず、彼女の同じ種と思ったようだ。

あるとき、グジャラートを洪水が襲い、サバルマティ川が氾濫し、動物園の横の湖も溢れてしまった。そんな中、2頭のワニが湖から現れ、動物に入り込んでしまう。バーブーに呼ばれ、家でくつろいでいたジョシュアが駆け付けた。ジョシュアは「ワニ作戦」と名付けて、ワニを生け捕りしようと試みた。ジョシュアは武器も持たずに、素手でワニの尻尾と口をロープで縛

り、使われていなかった井戸に投げ込んだ。2頭のワニはマンガ (Manga) とマンガラ (Mangala) と名付けられ、園内の広い場所に移された。マンガラは卵を孵化させ、唯一ジョシュアだけはマンガラの傍で孵化した赤ちゃんワニを見ることが許された。

湖にはもう1頭ワニが残っていることは誰も知る由がなかった。そのワニは前足に傷を負っており、生きながらえるのは絶望的に思われた。湖には餌になる魚が乏しく、ワニは常に腹を空かせていた。ワニは湖の真ん中にある小さな島から野良猫や野良イヌ、牛などを湖に引きずり込んで食べていた。2週間ほど食糧にありつけなかったワニは決定的な過ちを犯してしまう。あまりの空腹に耐えられず、木陰で昼寝をしていた少年を湖に引きずり込んで食べてしまったのだ。翌日掃除人が湖に半分食べかけの手を見つけて大騒動になった。すぐに消防隊とジョシュアが呼ばれた。歯形からワニの存在が明らかとなった。人食いワニは直ちに射ち殺すべきだという市当局を必死に宥めたジョシュアは、彼ら動物園側がワニを捕獲するという事で当局と折り合いをつけた。2日間ジョシュアと彼のスタッフは湖の中のワニを捜し続けた。ジョシュアはどこを捜せばいいかを心得ていた。大きな牛肉の塊の中に鉄のフックを忍ばせて湖に沈め、その時を待った。そして、餌に食いついてきたワニをスタッフや消防隊と引き上げた、ジョシュアはすぐに射ち殺そうと構えていた警察官に、誰かが1発でも撃ったら、自分は辞職すると告げた。顎に刺さったフックの痛みから逃れようとワニは暴れた。その大きさはマンガとマンガラを優に凌ぐものであった。

竹の棒に縛り付けられて動物園に運び込まれた巨大なワニとジョシュアは、人々の盛大な歓迎を受けた。顎と前足に大きな傷を負ったワニは到底生き残れないと思われたが、予想に反して驚異的な回復を遂げ、しばらくすると卵を産むための穴を掘り始めた。そう、この巨大なワニは雌だったのだ。大きさ的に彼女はマンガとマンガラの母親である可能性が高かった。ジョシュアは彼女をスマンガラ (Sumangala) と名付けた。ジョシュアとバーブはスマンガラが卵を孵化させる手伝いをした。ジョシュアはスマンガラ

が卵を潰さないように、尻尾を持ち上げても尻尾を振り回すことなく、ジョシュアのなすがままに任せた。ジョシュアが尻尾を引っ張り、彼女の背中に乗ることさえも許した。この彼女のジョシュアへの信頼は人々を驚かせた。実はジョシュアはスマンガラが湖に1頭だけではなかったと確信していた。つがいの雄がいるはずであったが、いくら探しても見つからなかった。ジョシュアはずっと気にかけていたが、なす術がなかった。15年後にスマンガラの夫がジョシュアの前に突然姿を現した。ある雨が激しく降り、電話も不通になっていた深夜に4人の村人がジョシュア宅を訪れた。湖の近くの村で、3人の若者が泳いでいるところをワニに襲われ、一人は食べられてしまい、あとの二人はひどい怪我を負い、病院に運ばれたという。彼らはジョシュアに助けを求めに来たのだった。夜通しの見張りのあと、ジョシュアたちのチームはワニを生け捕りにした。動物園に運び、他のワニたちと一緒に檻に放すと、スマンガラが彼の元に寄って来た。一緒に水に潜り、日向ぼっこをした。生気がなく心配していたが、彼はその後2年間生き延びた。死後、解剖してみるとお腹の中の奥に鉄のフックが食い込んでいた。

ワニに続き、ジョシュアは湿地帯にやって来る渡り鳥の保護にも乗り出した。周辺に住む部族民たちがフラミンゴやカワセミなど貴重な鳥たちを捌いて旅行者に肉として売っているのに心を痛めていた。そこで、無傷の鳥を2倍の値段で買い取る約束をして、多くの種類の鳥たちを飼育することに成功した。ジョシュアは湿地ワニの交配とフラミンゴの捕獲と飼育で世界記録を打ち立てた。

ヒル・ガーデン動物園はアジアの動物園として知られるようになった。短期間にそれを成し遂げたジョシュアの才に娘のエスターも驚嘆している。当時のグジャラート州知事やアメリカのインド大使がジョシュアとの交遊を楽しみ、ジョシュアは著名人たちとともに、新聞の紙面を飾ることが多かった。アメリカ人大使ジョン・K・ガルブレイスは檻の外でトラのラジャーと写真を撮ることを望み、ジョシュアの監督の下で実現した。彼はジョシュ

アの天性の動物との関わりの才を称えている。

アメリカ大使に続き、ネヘルー（ネルー Neheru）首相が、動物園の向いに子供向け公園を開園する旨を伝え、ヒル・ガーデン動物園を訪れることになった。ジョシユアは警察当局と警備のための度重なる打ち合わせを行い、道路を補修し、檻にペンキを塗り、園を飾り立ててその日に備えた。ジョシユアはエスターにネヘルー首相の肖像画を描いてそれを彼に見せるように命じた。思い通りの絵が描けなかったエスターは写真をトレースして、そこに色をつけて間に合わせの肖像画を準備した。

厳重な警備の中、ネヘルー首相は動物園に到着した。歓迎のために炎天下で待ち続けた子供たちに笑顔を向けることなく、深刻な表情の首相にエスターは失望する。エスターたちの世代はチャーチャー（caca おじさん）ネヘルーは子供が大好きで、子供のために尽くしてくれていると教えられてきた。ジョシユアに命じられて、エスターはライオンの檻の脇に立って首相を待った。首相に肖像画を見せてサインをもらおうと思っていたエスターだが、ネヘルーの神経質そうな表情に緊張する。いつものカーキ色の服に身を包んだジョシユアも緊張した面持ちだった。終始不機嫌そうだったネヘルー首相も、ジョシユアの巧みな話術に徐々に打ち解けてきた。州首相が、ジョシユアは動物たちと意思の疎通ができるなどと話すと、ネヘルーはジョシユアに興味を示す。彼はジョシユアに動物学の学位があるか尋ねると、ジョシユアは「無学です」と答えた。するとネヘルーは「君はソロモン王の指輪をもたらされたのだろう」と話した。そんな会話を通して、ジョシユアもネヘルーと心を通わせた。そんなとき、ジョシユアはネヘルーにエスターを紹介し、肖像画を見せるように命令した。恐る恐るコピーした絵を彼に見せると、にっこり微笑んで絵を返してきた。そのとき、エスターが勇気を振り絞って、「サインをお願いします」と言うと、サインをして絵を返してくれた。脇にいたモラルジー・デサイ（Morarji Desai）がネヘルーに向かって何かささやくと、その場の空気が突然変わり、ネヘルーは固い表情になってし

まった。両者の関係は芳しいものではなかったようだ。ネヘルーは訪問者が感想を書くノートに、

子ども園と、噂に聞いていた動物園を訪れることができ大変嬉しい。ここは子どもたちにとって素晴らしい場所である。このような場所がインド中にもっともっと増えることを望んでいる。

ジャワーハルラール・ネヘルー 1961年4月4日

と書き残して去って行った。ネヘルー首相の動物園訪問は成功裡に終わり、ジョシユアも大満足であった。このあとすぐ、ジョシユアは母親シェババスに手紙を書いて、この成功を報告した。翌日第一面にジョシユアとネヘルー首相の写真が載った新聞を持って母親に会いに出かけたジョシユアをシェババスは涙を流して迎えた。長年の彼女のジョシユアに対する心配が報われた瞬間だった。

ヒル・ガーデン動物園は世界中の野生動物保護の専門家たちを魅了していた。その一人がオーストラリアの人類学者コリン・グローヴズ (Colin Groves) である。彼はジョシユアのことを気に入っており、よく動物園を訪れて野生のロバの交配などを学んでいた。グローヴズはイボイノシシの群れの中にブタに似た他と異なる動物に注意を向けていた。ジョシユアはそれを「太っちょ」と呼んでいた。それはかつての太守の友人からの贈り物であった。その友人はオーストラリアの友人から贈られた。いたずら好きの「太っちょ」はゾウをからかったり、イボイノシシをいじめるなどして楽しんでいた。ゾウのスマットラをからかい、鼻で投げ飛ばされ、危うく踏み殺されそうになったこともあった。ジョシユアが現れなければスマットラに踏みつぶされるところだったが、辛うじて難を逃れた。オーストラリアに戻ったグローヴズは、「太っちょ」の種について調べ、新石器時代のイボイノシシであることを解明した。彼はそれにジョシユアの名前をつけようとした。しかし、ブタの種ということで、敬虔なユダヤ教徒ではなかったが、豚肉を口にしたことのないジョシユアは抵抗を感じ、何度か拒んだが押し切れられ、サス・デイヴィッド・ダヴィディ (Sus David Davidi) と命名された。

その後、ジョシユアは人家に侵入した野生のヒョウを生け捕りにしたり、暴れるゾウをなだめて動物園に保護するなど、数々の武勇伝を残す。エスター自身も父ジョシユアが、野生の動物たちと意思の疎通ができる特殊な能力を授かっていたのだろうと推測している。

1975年、ジョシユアはインド大統領ファクルッデイン・アリ・アハメッド (Fakhruddin Ali Ahmed) から国民栄誉賞であるパドマ・シュリーを授与された。その前に彼は咽喉がんのために声帯を切除し、声を失っていた。なんとか電気喉頭を使って会話ができるようになっていた。授賞式後のお茶会では、時の首相インディラ・ガーンディー (Indira Gandhi) がジョシユアを称えて、「デイヴィッド、インドはあなたを誇りに思います」と言った。インディラ・ガーンディーはジョシユアの活動を熟知しており、その事業に心から興味を示した。ジョシユアも栄誉に思い、彼女の賞賛に応じて、彼女を動物園に招待した。しかし、彼女からの返事がジョシユアを動転させた。「動物や鳥が檻に入れられて飼育されていることを嫌悪します。動物たちが自由に動き回っていることを好みます。」とあった。ジョシユアは怒った。彼はすぐにインディラ・ガーンディーに、保護としての動物園の重要さを説明した返事を書いた。そのあとすぐ、彼女は非常事態宣言を発動して、ジャヤプラカーシュ・ナラヤン (Jayaprakash Narayan) やモラルジー・デサイを投獄した。ジョシユアはインディラ・ガーンディーの手紙にいたく傷ついた。親しい友人たちと酒を酌み交わす席でジョシユアは、「彼女は私の活動について熟知していた。誇りに思うとまで言った。もし彼らが動物園の重要さを理解していないのなら、何で私に蓮華大賞を授与したのだ」と語った。それから、ジョシユアは野生の保護と動物園の役割と重要性について何本も論文を書いた。それらをインディラ・ガーンディーを初めとする批評家たちに送り続けた。皮肉なことに、のちにジョシユアのアヒル・ガーデン動物園はネヘルー一族の名前が冠されることになった！

動物園はエスターにとってはユートピアであった。今では彼女の手を離

れ、アフメダーバード市の管轄となってしまった。

ジョシュアの死の1か月前、さかりがついて狂暴になったアショカ (Ashoka) という名前の雄ゾウが、ゾウ使いを踏み殺して暴れまわった。ゾウはどうしていいか分からないまま、市内に向けて前進を続け、熱くなった体を冷やすために大荒れの川に入った。消防隊から応援の要請を受けたジョシュアは、すでにかつてのような体力はなかったが、ゾウが射殺されることを思うと居てもたってもいられずに、市当局のジープでネヘル橋に向かいそこで待機した。望遠鏡で川の中のアショカを観察した。彼の長年の経験から、このような状況下ではゾウは人間と関わることを好まないことを知っていた。ゾウが川から無事助け出されたら、動物園にいる雌ゾウのスマットラ (Sumitra) と理想的な伴侶になると思った。悩んだ末、ジョシュアはスマットラに願いを託し、スマットラを雄ゾウの元へ送った。もし、雄ゾウにスマットラが殺されてしまったらという思いもよぎったが、彼は動物の本能に賭けてみる決心をした。スマットラが川に入っていくと、ジョシュアは知っている限りのヘブライ語の祈りを唱えた。敬虔なユダヤ教徒とはいえなかったジョシュアであるが、この時人生で初めて、「もしスマットラが狂った雄ゾウを宥めることができたなら、過ぎ越しの祭り⁵⁾を準備します」と願掛けをした。大勢の人々が見守る中、スマットラを目にしたアショカは甲高い声をあげた。それは親愛を示す声だった。2頭のゾウは互いの鼻を絡め合い挨拶した。スマットラの上に乗ったゾウ使いは彼女を川岸に向かわせると、アショカは鼻でスマットラの尻尾を掴んで彼女に従い、ヒル・ガーデン動物園までついて行った。これはジョシュアが起こした最後の奇跡であった。だが、彼は過ぎ越し祭を祝うことなく逝ってしまった。

まとめ

あくまでフィクションとして書かれた本書ではあるが、ジョシュアの人生はレーベンのそれと一致する。レーベンは独学で動物学や剥製技術を身

に着け、自然保護に尽力した。本書で述べられているように、1951年にアフマダーバード市立動物園設立を任され、カマラ・ネヘルー動物公園(Kamala Nehru Zoological Park)、ネヘルーおじさん子供公園(Caca Nehru Balvatika=Children's Park)、自然史博物館を設立した。また、アフメダーバードのスンドルヴァン(Sundarvan)とガンディーナガルのインドロダ(Indroda)公園の顧問としても奉職した。また、本書でも言及があったが、1981年にオーストラリア人の人類学者コリン・グロヴズ(Colin Groves)が発見した新石器時代のイボイノシシの名前に彼の名前が付けられている。長年の功績が称えられて国民栄誉賞にあたる蓮華大賞(Padma Shri)を1975年に授与されている。このように本章では当時のインドが置かれた状況にも触れられている。

ベネ・イスラエル・コミュニティ関連で特筆すべきことは、ジョシュアがナオミとの結婚の経緯をめぐって、コミュニティと距離を置くようになった点である。ベネ・イスラエル・コミュニティでは父親の許可のない結婚は正式な結婚と認められず、シナゴグでユダヤ教徒としての挙式を行うことができなかった。ジョシュアが1975年に蓮華大賞を受けるまで、両者の溝は埋まらなかった。

本章では、ジョシュアの自然や動物との関わりにおける特異な才についてのエピソードが中心となっており、ベネ・イスラエル・コミュニティについての言及が少ない。次回扱う4章エスターではエスターの波乱万丈な生き方と、彼女がユダヤ教徒として自覚を深めていく過程が描かれる。

(Ⅲに続く)

注

- 1) Quit India movement クウィット・インディア運動：1942年8月8日の国民会議派の全国員会で採択された決議で、イギリスのインドからの撤退を求めたことから始まった運動。「ガンディーの指導下で、非暴力的方法による大衆的闘争を開始する」というよびかけ。インド各地でさまざまな反英闘争が展開された。

- 2) インドの民間人を顕彰する勲章。インドでは4番目の格式をもつ。1954年に制定された。毎年インド共和国記念日に、インド政府によって授与される。
- 3) インドがイギリスから独立した当初、インドには動物園はなかった。1951年から野生動物保護の必要性が議論され、1953年に首都デリーに初の動物園開園にむけて場所が準備された。最終的に国立動物公園が開園したのは1959年である。本文でも触れたが、チャンド・ラル教授がイギリスを訪れた際、ロンドン動物園(1828年開園)を見学して、インドにも教育的かつ娯楽の目的で動物園を開園したいと思い、移動式動物園兼サーカスを運営したのがアフマダーバード動物園のベースとなっている。教授の高齢化に伴い、アフマダーバード市に譲渡され、ジョシュアがその責任を任されたのが1956年であることから、ジョシュアの動物園がインド初の動物園といえる。
- 4) インド西部からパキスタン南西部にかけて見られるアフリカ系黒人の集団の総称。インドではスィーディー(*Siddi*)と呼ばれる。名称の由来は「ムハンマドの血筋、高貴な血筋をもつ人」を意味するサイアディー(*Saiadi*)が変化したもの。浴びシニア(エチオピア)出身者という意味からハブシー(*Habshi*)とも呼ばれる。人口は約5万人といわれる。
- 5) ユダヤ教の重要な祭日の一つ。エジプト人の奴隷であったユダヤ民族のエジプト脱出を記念する祭り。1週間祝われる。神がエジプト中の赤子を殺したときに、羊の血を戸口に塗ったユダヤ人の家だけは過ぎ越したという故事にちなんでいる。